

原始仏教教団における 頭陀行者の諸相について

木 川 敏 雄

原始仏教教団において頭陀行者がどのような存在であったかについて本稿は論究するものである。

頭陀行者である小給孤独帝須、大迦葉、優波斯那等の行動を明らかにすることから教団内における頭陀行者の有様と共に偽頭陀行者について明確にしていきたい。

教団内で行なわれた比丘達の生活については四依と長利に示されている。比丘生活の原則は四依（糞掃衣・乞食・樹下坐・腐爛葉）であり、入団の際に伝えられるが、それは形式で、実際の比丘の生活は長利（施衣・請食・精舎・藥）であった。

そこで、四依と頭陀との関係であるが、頭陀行は四依に根幹を置いていると考えられる。Suttavibhāga, Parāṇika, I. に記されている須提那の頭陀行は四依とほぼ一致し、四依の腐爛葉だけが記されていないのである。頭陀行は四依と苦行の中間的存在で、釈尊が許容された苦行的行であると言え、永崎亮寛氏の『印仏研』第二十七卷第二号にも、頭陀行の内面には苦行主義的色彩を有している、とされている。

『四分律』第四十巻には、比丘が様々な威儀を調べ、釈尊にその適否を伺うのであるが、どれも釈尊の拒否を受けたことを記してい

る。すなわち、比丘達は様々の頭陀行をするが、そのことを釈尊が認定することによって、頭陀行が決定されていったのである。

次に、頭陀行をしていた比丘が還俗したり、破戒したりした伝承を見ることにしたい。

Jātaka, Vāṇiṃgaṇṭaka (14) Vol. I. には、十三頭陀行をしていた小給孤独帝須が味覚欲につられて還俗したケース・『五分律』第二十六巻には、頭陀法を受けた阿練若住比丘であったものが、その法を捨戒しないで請食や屋舎を受けたケースを記している。これらの伝承から、俗な事や安易な方向に頭陀行者を誘惑してしまう要素を孕んでいる頭陀行は、いかに厳しいものであるかを窺わせるのである。

次に、大迦葉について考察することにしたい。『印仏研』第二十九巻第一号の拙稿に基いている。

大迦葉の出家の原因は『仏本行集経』第四十六巻、『根本説一切有部苾芻尼毘奈耶』第一巻に記されているように、婆羅門の生活の基礎が「殺生」によって成立していることを大迦葉が知ることになり、困っているのである。

出家後、外道的修行をしていた様であるが、仏教教団に入団してからの大迦葉は四依の生活者であったであろう。この四依の態度を保つことこそ、大迦葉が出家時に求めていた梵行と共通するものであると考えたのであろう。つまり、『根本説一切有部苾芻尼毘奈耶』に記されている大迦葉が出家を志した時に言った人生観（人間は微細なものであること）と四依とは一致するのである。

さて、大迦葉は教団内で自他共に認める頭陀行者となつてからの行動を求めることにしたい。

「五濁・像法と五因によって正法が退滅する。」と釈尊は大迦葉に答えられたのである。つまり、釈尊のお答を引き出したところの「戒・学が多いのはなぜでしょうか。」という大迦葉の間の意味するものは、教団内に乱れが生じていたことを物語っているものである。この伝承は『S·N, Kassapa Sāṃyutta』第十三、『維阿含經』第三十二卷、『別訳雜阿含經』第六卷に記されており、これらの資料を比較対照すると、記述内容に相違はあるが、ほぼ一致しているのである。

なお、大迦葉は年老いても阿蘭若・乞食・糞掃衣の生活をしていたのである。やがて、釈尊が入滅されると、法と律の散逸を防ぐために王舎城結集を大迦葉は主宰したのであった。

従って、大迦葉は釈尊に認められていたので、他の比丘の行動に対して鋭い批判をし、告発をすることができたのである。

次に、偽頭陀行者に関する伝承を見ることにしよう。

Jātaka, Vakajātaka (300) Vol. II. には次の様に記されている。

優波斯那は知足の徳を備へ十三頭陀を修し、弟子達にもその頭陀を行なわさせていた。釈尊が三箇月間独居をしておられた時、優波斯那は弟子と共に釈尊のおられる所に到った。そこで、「これから以後、三箇月間独居の時でも頭陀をしている比丘は私に会うことを許す。」と釈尊は優波斯那と彼の弟子達に話された。その事を聞いた他の比丘達は頭陀を装って釈尊にお目にかかりに行くが、その後、その比丘達は糞掃衣を投げ捨てて、自分達の清浄衣を着たとしているのである。

多少の相違はあるが、Suttavibhanga, Nissaggiya, XV, 『四分律』第四十一卷、『五分律』第四卷、『十誦律』第五卷にも同様の伝承が

原始仏教教団における頭陀行者の諸相について（木 川）

記されているのである。ただ、『四分律』、『五分律』、『十誦律』等の資料には頭陀行を利用するような比丘はいなかったことが記されている。

しかしながら、南伝系の資料に記されていることは、長利の生活をしている比丘が頭陀行者だけに認められている権利を利用した伝承が記されているのである。つまり、頭陀行者が長利の比丘によって出汁に使われたということの意味しているのである。

以上の考察から、小給孤独帝須、大迦葉、優波斯那等の頭陀行者の有様について明らかにしたことから、原始仏教教団内における彼らの位置、果たした役割、またその利用のされ方等について論究したので、教団内での存在の意義について述べることにしたい。

原始仏教教団において、悪比丘の烙印を押された提婆も実は頭陀行者であり、破僧して自己の教団を成立させた（拙稿『印仏研』第三十卷第一号）が、その原点に頭陀行が存在していることに注目しなくてはならないのである。

頭陀行者は四依を厳しくした頭陀行を行なったことによって、長利の比丘達から尊敬を受ける比丘となったのである。そして、頭陀行者は教団内の乱れを厳しく批判することができ存在であったからこそ、頭陀行のことから、提婆のように、釈尊の教団を破僧して新教団をつくることもできたのである。

まさに、頭陀行者は教団にとって、浄化作用を持ったユニークな存在であったことを明らかにすることができたのである。

（寺院住職）